小児病院図書室から教育機関へのアプローチ

塚田薫代
静岡県立こども病院図書室

序　当院は、静岡市北部に位置する病床 234 の小児専門病院である。
患者ご家族への医学情報提供、入院患児への児童書提供「わくわくぶんこ」のサービスを展開する中、退院後の患児のフォローアップの必要性を強く感じていた。小児病院の特性を活かし、教育機関との連携を推進中であるので、報告する。

破　具体的には次の3つの活動を行っている。

1　当院小児がん経験者復学校へのアンケート調査(2007 年 3 月実施)。
当院では、小児がん患児が退院する際、復学校の担任教諭、養護教諭を招いて、病状説明等の情報提供を行っている。当室もプロジェクトチームの一員として参加。
アンケート質問項目に[病気の理解のために資料や図書を利用したか？病院司書の説明は参考になったか？]を付記。回答9名中、7名が当室を利用し、4名が参考になったと回答。

2　学校図書館との連携
①「学校図書館を考える会・静岡」 学校図書館司書、市民からなるネットワーク。当室は平成 14 年より会員。メーリングリストを通じ、学校向け医学書リスト「障害を知る本」「メンタルヘルス」などを紹介。2008 年1月には、学校司書、保護者を対象に講演「思春期のカラダとココロの処方箋」を行う。ブックトーク資料、関連医学文献の展示、デリバリーを行う。
②「中部高等学校図書館研究会」 静岡県中部地区高等学校48校加盟。2008 年6月、講演「メディカル寺子屋高校編」を行う。学校司書、司書教諭、学校教諭40名が参加。性教育、スポーツ障害、メンタルヘルス等、エビデンスに基づき、学校現場での正しい情報の必要性をアプローチ。

3　県教育委員会との連携
「県・市町子どもの読書活動推進担当者連絡会」 主催は静岡県教育委員会社会教育課。
県内公共図書館の児童書担当者および自治体担当者50名が参加。定期的に開催。
当室も小児専門病院として、学校現場で必要とされる、健康保健情報を提供。

急　教育現場において、医学情報へのニーズが大変強いことを痛感する。
エビデンスに基づく医学情報に始めて接し、「大変有効だった」「どうしたらこういった専門的情報にアプローチできるのか知りたい」という教諭の意見あり。
小児病院図書室として、教育機関と連携することで、疾患に対する正しい認識が広がり、退院する患児のバックアップ、一般児童生徒のヘルスリテラシー教育に繋がると確信する。